

鶴田さんの歩み

- 2011年 東京を拠点に株式会社マルタの代表を務めていた鶴田志郎さんが、農園に戻る
- 2012年 有機農業に関する講座を開設
- 2013年 園地を約3ヘクタール拡大、合計14ヘクタールの経営に
- 2015年 2012年から研修を受けていた中村学さんが隣県で独立し、有機農園をはじめる
- 2016年 大寒波による被害をきっかけに社内システムを改良



地域の有機農業を牽引する農家として紹介。先代と志郎さんが苦勞して経営を軌道に乗せたことが語られた



出荷のピークを迎える作業場。ひとつずつゴミを除いてみかんを磨き、箱詰めする

農園では2000年ごろから研修生を受け入れています。中村学さん

農園で培ったノウハウや人脈で次世代へバトンをつなぐ

弱いレモンが特に大打撃を受け、収穫量は1700ケースから400ケースに落ち込みました。この激しい減収により大改革が始まります。まずは朝晩のミーティングを強化。作業内容を明確にして効率化を目指しました。定期的な役員会で情報を共有し、作業の無駄はないかなど、改善の余地も議論。こうした努力が実り、2019年には赤字分を取り戻す見通しが立っています。

は神奈川県から家族と共に移住、3年間の研修期間では、施肥や下草刈りなどから、収穫時期の見極めや出荷の方法まで学びました。2015年に独立して甘夏の栽培をはじめたのですが、独立直後は台風や寒波が来るたびに右往左往したそう。「農園で学んだことは全作業の一部。全体を見渡す難しさを知り、慣れるまでに3年くらいかかりました」と話します。農園では年に数回講師を招き、有機農業に関する講座を開設。中村さんのためにはじめた取り組みですが、今では社内の他、周辺農家や県外の就農希望者まで参加するようになっています。「中村さんのように軌道に乗る人はわずか。ノウハウや経営が難しく挫折する人がたくさんいます。ですが次世代につながるためには、こうした取り組みが重要だと感じます」。志郎さんが手に取るみかんには将来を担う生産者を育てる熱意もつまっています。



中村さんの農園では甘夏をひとつずつ袋詰めし、北海道の洞爺湖町にある雪蔵へ。5～6月まで貯蔵し、出荷時期をずらして販売する

中村さんご夫婦。2018年に甘夏の有機JAS認証を取得し、2019年からはレモンの園地を造成予定



「分からないことがあれば、志郎さんに相談できるのが心強い」と中村さん。志郎さんも中村さんの様子が気になって、ときどき中村さんの園地へ足を運ぶのだそう



甘夏の収穫が終わったところで、作業場はコンテナでいっぱい

バトンを受け取った中村さん

過去に本誌に登場していただいた3名の方を再び訪ね、前回の取材時からの変化や今後の展望など、それぞれの「今」について、お話を伺いました。

取材・文／池田菜津美 撮影／熊野淳司

あの人は今



ほとりさんと夫の志郎さん。有機農産物の流通会社を立ち上げ、東京に単身赴任していた志郎さんは7年ぶりに農園を拠点に。久しぶりの農作業が楽しくて、いつもみかん山を歩いているそう

File

1

2010年5月号「第13回 日本の篤農家」に登場

鶴田ほとりさんのそれから

熊本県

有機農業に取り組んで40年以上
今なお新しい挑戦は続く

鶴田有機農園は化学肥料や除草剤を一切使わない農園です。土の中の微生物がよい土を作り、その土で育った柑橘類はうま味や酸味、栄養がたっぷり。こうした有機農業を先代から40年以上も続けてきました。

現在はほとりさんと夫・志郎さんの二人三脚、さらに次男の正徳さんも加わり、農園は一層活気づいています。2013年には3ヘクタールの園地を造成、農園を拡大しました。一方で、今までの作業方法の見直しも。選別作業を光センサー付きの選果機に任せ、作業効率格段にアップ。これは正徳さんの尽力によるものです。

近年は気候の変化が激しく、抜本的な対策を迫られたこともありましたが、2015年2月の大寒波では、寒さに



園地拡大、収穫量の増大により、手選別が難しくなったため、光センサー付きの選果機を導入。精度と酸度をセンサーで測って選別する



冬の間は1日約12kgのむかごの選別を行う

写真提供/JA八戸



(上) 冬は作業小屋周辺の雪かきも重要な作業のひとつ
(左) 山いもの収穫は初冬と春の2回。むかごを植え、芽を出した1年目の子を作り、翌年に成いもまで育てて出荷



ココにいます!



森田さんの歩み

- 2012年 青森県立三本木農業高等学校卒業後、実家を継いで就農
- 2017年 長いものに緑肥農法を導入
- 2019年 長いも・ごぼうの収穫面積を少しずつ増やし、それぞれ約2倍に

File

3

2009年12月号特集「若い力ー農業高校は、いまー」に登場

森田格勝さんのそれから

青森県

農業の楽しさを感じるから新しいことにも挑戦したい

高校卒業後に就農して6年、自営で長いものとごぼうを生産している森田さん。最初は戸惑うことばかりで、作物の育成不良や収穫量の減少など、悩みも多かったそうですが、高校で多種多様な植物を栽培した経験と知識を武器に「何事も行動あるのみ」と前向きでした。例えば、根菜類は同じ畑で育て続けると病気にかかりやすくなるため、2年前からはJA八戸の力を借り、長いもの葉などを畑にすき込む緑肥という方法を導入。「これから結果が出るので楽しみ」と笑顔がこぼれます。

就農時から収穫面積を少しずつ広げ、現在は約2倍に。長いものは約1・6ヘクタール、ごぼうは2ヘクタールまで増やしました。祖父が育てていた大根の復活も計画中。大根は気候に左右されやすく、市場での価格が変動しやすい野菜で、育て方や生産量の調整に手間がかかりますが、当たったときの喜びも大きいのだとか。自分の知見が試されるという意味でも、一層やりがいを感じるのだそうです。

「地元で農業に携わる以上、地域を元気にしたいんです。農業で何か地域に貢献できないか、そんなことも考えています」。森田さんの挑戦は始まったばかりです。

affが変わります



今月号をもちまして冊子での発行を一旦休止し、次号からデジタル化します。省Webサイトへの掲載のみとなりますが、スマートフォンなどにより見やすいデザインにリニューアル。新しいaffにご期待ください。



ココにいます!



(上) 花に袋をかけて花粉を採取し、他品種に受粉させ、新しい品種を作る
(右) いちごは地上近くを這って伸びる茎(ランナー)で増やすのが一般的だが、近年の研究で種子繁殖が不可能ではないことが分かった



File

2

2016年4月号特集「今、農学部が熱い!」に登場

中川卓也さんのそれから

千葉県



中川さんの歩み

- 2017年 千葉大学大学院園芸学研究所卒業。同年4月、千葉県の園芸植物育種研究所に就職
- 2018年 いちご研究用のハウスが完成。本格的にいちごの育種研究をスタート

興味がなかった育種の分野関わってみると奥深い世界の虜に

「細かい作業が苦手な育種にも興味はありませんでした。やってみると楽しいものですね」と話す中川さん。取材時、ハウスは受粉作業の真っ最中で、慣れた手つきでいちごの花に袋をかけて回ります。

千葉大学の大学院で栽培を研究したのち、園芸植物育種研究所に就職。新しくいちごの品種開発に取り組むにあたり、中川さんがハウス建設を担当しました。「大学時代に学んだ養液栽培や施設園芸の知識が役に立ち、農業資材関係の企業にいる後輩からおすすめの機器を教えてもらったりしました」。

2018年からは本格的にいちごの研究がスタート。種子で増やせる新品種の開発が目の下の課題で、味はもちろん、育てやすく病気に強い、高品質なものを目指しています。「よい性質がうまく受け継がれないことも多々あって、大学院でもっと遺伝を勉強しておけばよかったな。なかなか奥が深くはまっています」。驚きや発見を与えてくれるいちごと毎日向き合って格闘中です。